『天使といたとき』

平成二七年改訂版

作・鶴川里香

初演　二〇〇九年

（登場人物）

有森江梨子……見た目もよく勉強もスポーツもできる
天使……交通事故にあった江梨子を担当する

川上ゆい……弱小演劇部の部長　高校を卒業後病気で他界
飯島めぐみ……文化祭だけ演劇部に参加
五十嵐麻紀……元演劇部　江梨子に誘われて復活
浜崎美優……文化祭だけ演劇部に参加
藤本佐夜子……バレー部部長　文化祭だけ演劇部に参加
浦辺明里……演劇部二年
松下紅美……演劇部一年
高原深雪……演劇部の新入部員１年生
梅野かすみ……元ミュージカル部員

白樺薫子……ミュージカル部部長
桜木このみ……ミュージカル部員
林田咲子……ミュージカル部員
森山瑠璃……ミュージカル部員
ミュージカル部員たち

1　住宅街

有森江梨子（20）が歩いている。

烈しい車の急ブレーキの音。

江梨子「びっくりした。こんな狭い道でスピード出さなくても……」

天使登場。

天使「ハーイ♪」

江梨子「なんですか？」

天使「あ！変な人に声をかけられたと思ってるでしょ。何この人、パーティ会場から抜け出て来たの？とか、何かの罰ゲーム？とか」

江梨子「……」

天使「ハズレでーす。私は本物の天使です」

江梨子「バカバカしい（去ろうとする）」

天使「ちょっと待って！最後まで話聞いてよ。あなたのためなんだしさ」

江梨子「私のため？」

天使「（深刻に）実はね……、驚かないで聞いて欲しいの……。あなたはもう死んでいます！」

江梨子、去ろうとする。

天使「だから待ってってー！」

江梨子「何なの？つきあってらんないだけど」

天使「つきあってもらわなくちゃ困るよ。あなた本当に死んでいるんだから」

救急車の音。

天使「今、交通事故にあって、あなたは死んだの」

江梨子「あれは……私？」

天使「残念ながら」

江梨子「じゃ、本当に天使なの？なんかイメージと違うなぁ」

天使「え？違うの？いかにもっていう方がいいと思って、わざわざ輪っかと羽をつけてみたのに」

江梨子「もっとティンカーベルみたいにちっちゃくて、パタパタ飛んでいるんだと思った」
天使「何？ティンカーベルって？」
江梨子「ピーターパンをネバーランドに連れて行く妖精だよ」
天使「見たことあるの？」
江梨子「ないけど」
天使「じゃ、本当はどんなのかわからないじゃない」
江梨子「本当の天使はみんなあなたみたいってこと？」
天使「これは突然現れてもおどろかないように、なるべく死んだ人と同じ年頃にしているの」
江梨子「じゃ、あなたの本当の姿は？」
天使「……その『姿』っていうのが人間っぽい感覚だよね。たぶん説明してもわかんないよ。あなたと私たちは違う次元で存在してるし。それよりあなたの話しをしましょう」
江梨子「そっか……私、死んだのよね」
天使「こんな若くして突然死ぬなんて、悲しいよね」
江梨子「……」
天使「しかし！あなたはラッキーなのです！あなたは私が天国にお連れする1億番めの魂です！ハイ（調整室に合図を出す）」
ファンファーレの音。
天使「おめでとうございまーーす！あなたにはすごい景品が用意されているのです♪こんなに突然死んでしまって、やり残した夢や、あと後悔していることだってあるでしょ。あなたが望む未来体験か、やり直したい過去を最大 30 日まで体験することができます。何がしたい？」
江梨子「別にいいよ」
天使「何よ、もう！遠慮しないで～」
江梨子「後悔なんてないし、これといって覗きたい未来もないもの。死んだんだから早く連れて行ってよ」
天使「だって、将来の夢や希望があったでしょ。まだ大学生なんだ

し」
江梨子「私はきっと、国家公務員になっていたと思う。政治家になりたいって言ったら、父の口添えで大物政治家の秘書を経験して立候補かな。実業家になるのはもっと簡単。適当な歳で結婚して、働くか働かないかはその時決めればばいいかな……ぐらいにしか考えてなかったよ」
天使「じゃ、思い切って女優とかアイドルになるってどうよ」
江梨子「多分芝居も歌も出来ると思う。でも、あこがれはないよ」
天使「じゃあさ、過去に行こうよ。失敗したことをやり直しに」
江梨子「私は勉強しなくても一番だったの。練習しなくてもスポーツ万能なの。だから何も失敗はない」
天使「うそだね。20年間勝ち続けてるなんてことないでしょ」
江梨子「負けたことないよ」
天使「絶対あるね！ちょっとまって……うーーーん……見えた！あなたは高三の合唱コンクールで優勝してない！」
江梨子「あれはクラス対抗だし、私のソロは特別賞もらったもの」
天使「でも負けてる！勝ちに行こうよ」
江梨子「いいってば」
天使「よくない！」
ブリッジ音。照明変わる。

2　高校時代（合唱コンクール前）

江梨子、高校生の制服になっている。
周りにクラスメイト。イスに車座。
麻紀、美優、めぐみ。天使もいる。
麻紀「とにかく曲を決めようよ」
美優「練習の日程ってどうするの」
めぐみ「実行委員なんて最悪……ね、有森さん」
江梨子「……本当に高校生になってる……」
麻紀「え？何々？」

江梨子「あ、ごめんなさい。えーと、私たちは合唱コンクールの
実行委員ってわけね」
美優「……そうだけど」
江梨子「私、実行委員なんてやってたっけ」
麻紀「どうしちゃったの？私たちくじ引きで決まったじゃない」
めぐみ「合唱コンクールなんて不必要だよね。これとマラソン大会
はマジなくなって欲しい」
美優「私は高校時代の思い出にコレってものがないし、合唱がいい
思い出になればいいなと思うけど」
めぐみ「高校なんて、いい大学に行くためにあるんでしょ？思い出
なんて受験に関係ないよ。あーー！マジで世界史ヤバイよぉぉ」
麻紀「わからなくもないけど、決まったことはやるしかないよ」
ゆいが駆け込んでくる。
ゆい「実行委員の話し合いしてたんだ！ごめんね～」
麻紀「どうしたの？」
ゆい「ちょっといい？有森さん、お願いがあるんだけど」
江梨子「なに？」
ゆい「臨時で演劇部員になってくれない？文化祭だけでいいの」
江梨子「私が？」
ゆい「小学校の時、児童劇団に入ってたって聞いたの。お願い」
美優「あれ？ミュージカル部だったっけ？」
ゆい「演劇部だよ」
めぐみ「演劇部なんてあったんだ」
ゆい「最後の文化祭だから、文化祭に参加したいんだけど、部員が
三人じゃ、認めないって生徒会に言われたんだ。だからお願
い！」
江梨子「ちょっと、天使！」
クラスメイトたちの動きが止まる。
天使「どうしたの？」
江梨子「私、ちょっとだけ後悔したことがあった」

天使「何々？」
江梨子「この子、川上ゆいさん、高校を卒業したあと、病気で入院して19才で亡くなってるんだよね」
天使「私の担当じゃなかったからわからないけど」
江梨子「私ね、川上さんに文化祭一緒にって言われて断ったんだけど、お葬式の時、そのことを思い出してね」
天使「手伝うの？」
江梨子「演劇は大学に行ってからゆっくりやればいいじゃないなんて言っちゃったんだ。大学には1ヶ月も行けなかったって聞いたの」
天使「それは気の毒に」
江梨子「30日ならどこでもいいんでしょ。だったら文化祭の30日前にしてよ」
天使「あなたの最後の願いをかなえるんだから、もちろんｏｋだよ。じゃ、行きましょう」
ブリッジ音。照明変わる。

3　高校時代（文化祭一ヶ月前）

演劇部の練習風景。
1年の浦部、2年の松下が発声練習をしている。
一生懸命だが、声が小さい。
浦辺・松下「あめんぼあかいな、あいうえお……」
ゆい、江梨子、天使入ってくる。
ゆい「本当にうれしいよ、ありがとう！」
江梨子「そう言ってもらえるのはうれしいけど、最低でもあと3人探さなくちゃ、文化祭には出られないでしょ。それに照明や音響を考えるとお手伝いでもいいからもっと欲しいよ」
ゆい「浦辺さん、松下さん」
浦辺・松下「はい！」
ゆい「出演者募集のポスター作ろう！」

松下「私、絵は得意なんです」
浦辺「絵=は=って……芝居も得意でなきゃダメじゃない」
松下「すみません」
江梨子「とりあえず、特技は活かしましょう！すぐに作る用意して」
松下「はい（道具を取りに入る）」
江梨子「私たちはめぼしい人をスカウトしに行こう」
ゆい「うん、じゃ浦辺さん、あとは頼んだね」
浦辺「はい！」

4　校舎内

体操服姿の佐夜子。

佐夜子「どうしたの？」
江梨子「藤本さん、演劇に興味ない？」
佐夜子「何言ってんの！ないよ、全くない！私、部活に戻るね」
江梨子「でも、あなたの声はすごく通るし、絶対うまいと思うの」
佐夜子「声が大きいのは認めるけど、演劇なんて……」
江梨子「部活であれだけ声を出し続けているんだもん、声はしっかりしているよ」
佐夜子「でも、無理だよー」
江梨子「クラスでものまねやったりもしてるじゃない」
佐夜子「え！見てたの？」
江梨子「あれはすごい才能だよ。芝居心がある証拠！」
佐夜子「でもなぁ……」
江梨子「バレー部の練習は毎日じゃないでしょ、妨げないようにするから。それに、バレー部も人数が足りなくて夏の予選難しいんでしょ」
佐夜子「あれだけはギリギリの人数でも出るよ」
江梨子「私……協力してもいいよ」
佐夜子「マジ？？有森さんがいれば、初めて一回戦勝てるかも！」
江梨子「だから、お願い！」

佐夜子「いいけど……」
江梨子「ありがとう！」
佐夜子「でも、似合うかなぁ。あたし、フリルのドレスを着て歌ったことなんてないよ」
江梨子「藤本さんの演劇のイメージ……って……」

ゆい、江梨子、天使と麻紀。

ゆい「文化祭だけ！ダメかなぁ」
麻紀「私がいたのはたかが二ヶ月だよ。発声練習くらいしかしたことないし」
江梨子「でも、興味があったから入ったんでしょ」
麻紀「歌とダンスは自信ないからミュージカル部には入れないし、演劇部ならって感じだったんだよ。結局、人数少なくて何もできなさそうだったし……」
江梨子「だから今度は舞台を作るんじゃない！」
ゆい「戻ってくれたらうれしいよ」
麻紀「……ヘタでもいい？」
ゆい「私だって自信ないよ。でもやってみたいんだ」

めぐみ、美優が帰ろうとしている。

江梨子「浜崎さん、高校時代の思い出を作りたいって言ってたよね」
美優「あたしが？」
江梨子「一緒に文化祭で思い出作らない？」
美優「私、そんなこと有森さんに言ったっけ？」
江梨子「あれ？合唱コンクールはやりなおしてないのかな……」
めぐみ「美優、マジでやるの？」
美優「そうだなぁ……」
めぐみ「だって、文化祭の講堂ってミュージカル部のものでしょ」
江梨子「そんな決まりはないよ。生徒会には申請を出したし」
美優「やってみようかなぁ……」

江梨子「飯島さんも、やらない？」
めぐみ「やらない」
江梨子「出てくれたら、世界史のノート提出、私のノートを使って
いいよ」
めぐみ「……テスト前に世界史のポイントをまとめてくれる？」
江梨子「もちろん」

4　ミュージカル部。

ミュージカル部稽古中。
咲子「いかがですか薫子様」
薫子「不満ね」
このみ「と、おっしゃいますと」
薫子「みなさんのバランスがよろしくないわ」
咲子「かすみさん、歌ってごらんなさいな」
かすみ「……え……」
咲子「私たちの耳をごまかせると思って？」
かすみ「すみません」
薫子「歌のレッスンはなさっていらっしゃる？」
かすみ「……はい」
咲子「それで成長が感じられないとは、哀しい事実ね」
このみ「あなたはこのままミュージカル部員でいらっしゃるつもり
かしら？」
かすみ「無理だと思います」
薫子「残念だけれど、この部の厳しさは伝統ですのよ」
かすみ「……はい」
咲子「みなんさん、準備はよろしくて？」
部員たち「整いました！」
薫子「では、本日のエチュードをはじめましょう」
咲子、かすみを目でうながす。
かすみ、みんなに頭を下げ、出て行く。

誰も相手にしない。
入れ替わりで入る瑠璃。
瑠璃「薫子様！一大事です」

5　演劇部

トレーニングをしている。
入ってくる高原。
高原「あのー……」
松下「何か？」
高原「ポスターを見たんですけど」
浦辺「一年生！ありがとう、歓迎します！」
江梨子、ゆい入る。
江梨子「児童会から正式に講堂使用の許可が下りたよ」
浦辺「やった！」
あやめ「正式に動き出す感じだねー」
麻紀「台本はどうするの？」
ゆい「私ずっとやりたかったんだけど……『たけくらべ』はどうかな？」
美優「いいじゃない！私は賛成」
みんな賛成する。
ゆい「ありがとう！配役決めなくちゃね」
かすみが演劇部の様子をうかがっている。
浦辺「（気がついて）あれ？かすみちゃん、どうしたの？」
かすみ「あ……勝手に覗いてごめんなさい」
ゆい「見学大歓迎よ！演劇部に興味あるの？」
かすみ「……」
浦辺「（菜摘に）かすみちゃんは同じクラスなんですけど……
（かすみに）ミュージカル部だよね？」
佐夜子「なによ！スパイ？」
江梨子「ミュージカル部は私たちなんて相手にしないでしょ」

かすみ「入りたくて……」
江梨子「演劇部に？」
めぐみ「ミュージカル部は？」
かすみ「退部になっちゃって……歌が下手なんです……」
佐夜子「部活を続けたい人をやめさせるんなんて！あたしが文句言ってやるよ」
かすみ「いいんです！二年生になっても演習曲を歌いこなせなければ身を引くのが伝統なんです。覚悟してたし……」
美優「でも……」
かすみ「小学生の時に観た子供ミュージカルにすごく感動して、いつか私もあの中に入りたいって思ってて……、でも思っただけじゃうまくいかないんですよね。いくら練習しても歌はうまくならないし」
ゆい「じゃあ、一緒に演技の練習をしましょうよ。ミュージカルだけが舞台じゃないよ。歌とダンスがなくても、観ている人に感動してもらえれば最高じゃない。かすみちゃんは、きっとそのときの感動を誰かにわけてあげたいって思ったんでしょ」
かすみ「（笑顔で）はい！」
咲子が入る。
咲子「失礼、演劇部が文化祭に出るって本当かしら」
めぐみ「わ！ミュージカル部」
ゆい「本当です」
ミュージカル部員たちが入る。最後に薫子が入る。
佐夜子「白樺薫子！」
薫子「あなたたちの時間のために、ミュージカル部の公演時間が十五分も削られたんですの」
ゆい「ごめんなさい。でも、私たちだって文化祭に出たいのよ」
瑠璃「演劇部があるなんて知っている方はどれほどいらっしゃるのかしら」
薫子「本当に演劇部が舞台を作れるのか伺いに来ましたのよ」

咲子「いい加減な気持ちで参加されても困りますものね」
ゆい「いい加減じゃないわよ！」
薫子「まぁ、よろしいわ」
咲子「学校の注目はわたくしたちの舞台ですもの」
このみ「あら、かすみさんがいらっしゃるじゃない」
瑠璃「演劇クラブに入ったんですの？」
かすみ「……」
このみ「演劇クラブならいいわね。歌を歌わなくてもすむし」
江梨子「演劇はストレートのよさがあるのよ」
薫子「まぁ、有森さんがいらっしゃるの？あんなにミュージカル部にお誘いしたのに」
江梨子「ミュージカル部は高尚すぎて私には合わないもの」
このみ「演劇部は江梨子さんをもてあましそうね」
江梨子「そんなことないわ」
ゆい「私たちだって良い舞台を作るわよ」
咲子「あらあら、それはお楽しみね」
薫子「それではみなさん、よい舞台を（去る）」

ミュージカル部、去る。

ゆい「私たちだって、絶対に出来るもの」
江梨子「学校中を驚かそう」
ゆい「みんな、練習しよう」

6　演劇部（日替わり）

佐夜子「『本当かよ！これで鬼に金棒だ！信さん、何かあったら俺に言ってくれ。信さんに何かするやつは全部まとめてぶん殴ってやる』」
麻紀「『ありがとよ。でも、仲間になったんだ。俺もいざとなったら手を上げるさ』」
佐夜子「『さっそく、みんなを集めるぞ！』」

江梨子「ストップ！いいねー」
麻紀「佐夜子、ハマってるよ」
佐夜子「ちょっとおもしろくなってきたよ」
練習が続く。
ゆい「本当に有森さんって何でもできるんだね」
めぐみ「ホント、いいなぁ。何やっても楽しいでしょ」
江梨子「……楽しい？」
転換照明。

7　江梨子の部屋

天使と江梨子。
江梨子「私って楽しそう？」
天使「つまんないの？」
江梨子「わからない。おもしろくて笑うっていうのとはちょっと違うでしょ」
天使「生きることを楽しむってヤツ？人間らしいよね」
江梨子「ますますわからない。勉強ができることや、スポーツができることはべつに楽しんでいるとは思えない」
天使「出来てあたりまえなんだもんね」
江梨子「天使は何をしている時が楽しいの？」
天使「だから、私たちとあなたたちとは、根本的なものが違うんだってば」
江梨子「じゃ、なんで死んだ人を天国に運んでいるの？」
天使「運んでないよ。私は、死んだ人に死んだことを自覚させて、迎えに来た人に引き渡すだけ」
江梨子「迎えに来るんだ」
天使「その人をすごく待っていた人が迎えに来るんだよ」
江梨子「私は誰なんだろう」
天使「若いときに死んじゃうと、この世で会ったことがない人が来る場合もあるね。ずっと見守っていたひいおばあちゃんとかね」

江梨子「知らない人に連れていかれるのかぁ」
天使「でも、会うとわかるみたいだよ」
江梨子「なんで？」
天使「知らない」
江梨子「あなた知らないこと多すぎない？神様とか天使って何でも知ってるんじゃないの？」
天使「私は『知りたい』ってことないし」
江梨子「天使はいつ生まれたの？いつか死ぬの？」
天使「知らない」
江梨子「自分のことを知らなくていいの？」
天使「困ったことないもん。江梨子だって自分のことはわかってないでしょ」

8　演劇部

松下「すみません」
美優「もう一度やってみようよ」
松下「『あれ、鼻緒が切れて困っている人がいるよ』」
佐夜子「もっとさ、おなかに力いれてみなよ、あー！！ってさ」
めぐみ「元々の声が小さいんだから、仕方がないんじゃないの」
佐夜子「うちの部の一年だって、最初は声出てないけど、ずっと声出ししていると大きくなるよ。だから大丈夫」
浦辺「でも、松下だって、いつも発声はしているんですよ」
江梨子「どうしてもダメならワイヤレスを付けよう」
ゆい「なるべく自分の声でやった方がいい。もっと頑張ってみようよ」
松下「すみません」
浦辺「その『すみません』も大きな声で言って、ちゃんと鍛えなくちゃ！」
松下「すみません（小さい声）」
全員「（ため息）」

江梨子「次、筆屋のシーンやってみよう」
かすみ「『祭りの趣向は何にする？』」
麻紀「『神輿がいいよ』」
高原「（棒読み）『それじゃ女は見ているだけじゃない』」
めぐみ「なんでそうなっちゃうかなぁ」
高原「もう1回お願いします！」
何度やっても棒読み。
麻紀がかわりにやってみせる。が、出来ない。
高原「なんで出来ないんだろう（泣く）」
麻紀「とにかく練習してみよう。きっかけがつかめればできると思うんだ」
美優「やる気はあるもんね」
江梨子「全体的に、セリフを短く書き直そうか」
ゆい「有森さん、もっと努力をさせてあげようよ」
江梨子「でも出来ないって言ってるし」
ゆい「誰もが最初から出来るわけじゃない。出来ないから練習するんでしょ」
佐夜子「そうだよ！練習あるのみ！」
みんな練習を続ける。（無声）バックライトで影。
江梨子と天使だけに照明。
江梨子「練習すれば出来るようになると思う？」
天使「知らない。でも、みんな努力したいんだよ」
江梨子「あまり時間がないのに？」
天使「きっと努力することが楽しいんじゃないの？」
江梨子「努力ってツライことなんじゃないの？いつもみんなそう言うよ。それで有森さんは努力しなくても出来ていいなって……」
天使「人間ってそういうこと言うよね」
江梨子「わからない……、わからないよ」
天使「そんなに悩まないでよ。ゆいちゃんのために舞台を創るんでしょ」

江梨子「……それにしても、今はあんな元気なのに、川上さん病気になるんだね。それはどうしても変わらないことなの」
天使「変わらないよ」
江梨子「それは知ってるんだ」
天使「知ってるよ。私たちは人間の命を扱ってるんだもん。命の長さは変わらない」

9　演劇部（日替わり）

佐夜子、浦辺、松下。
松下「あめんぼあかいなあいうえおー」
佐夜子「わかった！そんな上品な発声だからダメなんだよ。中腰で足ふんばって！」
バレー部の声出しの姿勢。かけ声。
佐夜子「はい、やってみて」
松下「えー……」
佐夜子「さっさとやる！気合い入れる！浦辺！ボケっと見てないで、声出して！」
浦辺「私もですか？」
佐夜子「声出さなきゃレギュラーなれないよ！（体育会系ノリで）」
三人、声出しを続けている。
麻紀、美優、めぐみ、かすみ、高原。
高原「『それじゃ女は見ているだけじゃない』」
麻紀「もっとさ、こうやって『それじゃ女は』って思いっきり言ってみて」
高原「『それじゃ女は』」
かすみ「……楽しみにしていることある？」
高原「急に言われても」
かすみ「趣味は？」
高原「映画を見ることです」
かすみ「友達何人かと映画をみる」

高原「え？」
かすみ「想像して」
高原「は、はい」
かすみ「男子も女子もいる」
高原「四人くらいかな……」
かすみ「映画何みたい？」
高原「ラブコメディ！」
かすみ「でも男子はアクションって言ってる！しかも全然興味のない映画」
高原「……」
かすみ「それに決まりそう」
高原「えー……やだな」
かすみ「早く言わないと決まっちゃうよ」
高原「『それじゃ女子は楽しくないじゃん！』」
美優「いいじゃない」
かすみ「今の気持ちで」
高原「『それじゃ女は見ているだけじゃない！』」
めぐみ「すごいよ！もうひといき！」
佐夜子、浦辺、松下、三人で声を出している。
疲れて、佐夜子、浦辺が同時に止まる。
松下だけが声し続ける。大きな声。
浦辺「出てるじゃん！」
松下「……できた」
佐夜子「気合い入ってるよ！」
ゆい入ってくる。
松下「先輩！聞いてください。『あれ、鼻緒が切れて困っている人がいるよ』」
ゆい「すごいじゃない松下さん！」
松下「先輩、『さん』付けやめてください」
浦辺「佐夜子先輩みたいに呼び捨てにしてください。なんかずっと

気を遣われているみたいで。私たち厳しくされても演劇部やめたりしませんよ」

ゆい「ありがとう。浦辺、松下」

浦辺・松下「はい！」

佐夜子、感動して派手に号泣。

江梨子、天使に照明。

天使「やっぱり努力って楽しそうじゃんね」

江梨子「……」

10　演劇部（日替わり）

江梨子「みんな！私、一人で衣装を縫うから、みんなは台本を覚えていて」

ゆい「無理だよ！全部着物なんだよ。有りモノを直すにしたって一人じゃ間に合いっこない」

江梨子「大丈夫！やらせて欲しいの」

美優「有森さんなら出来るような気がするよ。任せよう」

麻紀「有森さんの役は？」

江梨子「セリフはすべて覚えてる。出番になったら声をかけて」

11　江梨子の部屋

江梨子、衣装縫っている。

あくび。ウトウトする。

天使そっと縫い物を取り上げて、続きを縫う

12　演劇部（本番前日）

みんな待ってる。

江梨子、大きな風呂敷を抱えて走ってくる。

ゆい「有森さん！」

江梨子「できたよ！前日になっちゃってごめんね」

めぐみ「やった！」

麻紀「早速着て練習しよう」
ゆい「じゃ、着替えようか」
　　みんな去る。
江梨子「あー、なんかやりきったなぁ」
天使「間に合ってよかったじゃん」
江梨子「この三日間ほとんど寝てないよ。こんなの初めて」
天使「本番前だから今日はちゃんと寝た方がいいよ」
江梨子「作ってるあいだはつらかったんだ。やっぱり一人じゃ間に合わないって何度も思った。でもできた……。できたんだね」

13　文化祭

　　全員集合。
ゆい「みんな、おつかれさま！あと三時間で本番だね。これから着替えて準備をしよう」
　　それぞれ動き出す。
ゆい「有森さん、本当にありがとう。昨日はゆっくり眠れた？」
江梨子「うん！元気になったよ」
ゆい「あのね……、有森さんのこと、江梨子って呼んでもいい？」
江梨子「え？」
ゆい「このあいだ後輩たちに『さん』付けは気を遣っているみたいでやめて欲しいって言われたの」
江梨子「私もゆいって呼ぶよ」
ゆい「江梨子！いい舞台にしようね」
江梨子「頑張ろう、ゆい」
　　ゆい、去る。
江梨子「天使、私ね、初めて友達に『江梨子』って呼ばれた。ずっと『有森さん』だっんだ」
天使「よかったじゃん。はいはい～、舞台、頑張って！」

14　舞台本番

舞台の様子、ラストシーン。

15　舞台裏

演劇部員たち、盛り上がっている。

ミュージカル部来る。

緊張が走る。

薫子「美咲先輩がいらっしゃったの」

佐夜子「ミュージカル女優の？」

薫子「ゆいさんはこのまま我が校の大学へ？」

ゆい「そのつもりだけど」

薫子「それならば、大学ミュージカル部へ招待なさいって」

みんな、ザワつく。

ゆい「美咲先輩に誘って頂けるなんて嬉しいです」

咲子「それじゃ」

ゆい「でも、私は演劇部にします」

このみ「大学の演劇部も部員も少ないし、活動しているかどうかも

わからないのよ」

ゆい「知ってる。だからこそ、努力してみたいの」

薫子「そう、気が変わる事を祈っているわ」

ゆい「変わらないと思う」

薫子「みなさん、まいりましょう」

薫子、背を向けたまま、

薫子「いい舞台だったわ」

ミュージカル部、去る。

ゆい「ありがとう！」

かすみ「ゆい先輩カッコイイ！」

ゆい「さ、打ち上げの準備をしよう！」

16　演劇部

佐夜子「みんなコップ持ったねー！舞台の成功を祝して、カンパー

ーイ！」
全員「カンパーーイ！！！！」
浦辺「演劇部部長のゆい先輩、ひとコトお願いします！」
ゆい「すごくいい舞台だったと思います。みんな、協力してくれてありがとう！」
麻紀「御礼なんて言わないで、ゆいのためにやったみたいじゃない」
美優「そうだよ。私たちだって充分楽しかったんだから」
高原「これで終わっちゃうんですね」
浦辺「なんで？高原は演劇やめちゃうの？」
高原「こんなにヘタなのに、部員にしてもらえるんですか」
美優「もうヘタじゃないじゃん」
浦辺「先輩は引退しちゃうけど、私たちはこれからだよ」
松下「部員、増やしていきます！」
かすみ「私もこのまま続けてもいいかな……」
浦辺「かすみちゃん！」
かすみ「私、歌が下手だから演劇でちょうどいいなんて思ってた。ストレートも難しいよね。練習続けたいな」
松下「一緒にがんばりましょう！」
めぐみが江梨子を引っ張ってみんなから離れたところへ。
めぐみ「あのさ、私、世界史のノート自分で作るから」
江梨子「なんで？」
めぐみ「私だけ取引して演劇に出たみたいじゃん。だから、テスト前にまとめなくてもいいよ。でも、勉強は教えてくれると助かるな」
江梨子「協力するよ」
様子を察して佐夜子が近づく。
佐夜子「なるほどね、あたしの方も無理しなくていいよ。有森さんがセッターやってくれると強くなりそうだったけどね」
江梨子「なんでよ、試合に出してよ」
佐夜子「いいの？」

ゆい「ねーねー、江梨子！」
美優「あれ？いつから名前で呼ぶようになったの？」
麻紀「ずるいよー。あたしも江梨子って呼ぶー」
めぐみ「私さ、卒業したらみんなで劇団作りたいな。大学に行ってもやりたいことなんてないって思っていたけど、みんなで続けられたらうれしいよ」
佐夜子「いいねー！」
松下「私も高校卒業したら入れてください」
江梨子「そうだね！みんなでまた演劇やろうよ！」
パーンとガラスが砕けるような音。

17　異空間

照明チェンジ。
江梨子と天使だけ。
天使「三十日経ったよ」
江梨子「そうか……、あたし死んでるんだもんね」
天使「そうだよ」
江梨子「人の命の長さは変えられないんだもんね」
天使「そうだよ」
江梨子「私……死にたくないなぁ……」
天使「そう思えることが大事なんだよ。この世に未練がないなんて、死んでも悔いがないなんて悲しいことだもん」
江梨子「私、もっと努力したかった。頑張って何かを作って感動したかった。私、つまらない人生だったよ、みんなが言うみたいに恵まれていたなんてことない。そのことにずっと気が付かなかった……」
天使「この世にやり直したことがあるなら、また生まれ変われるよ。さあ、もうすぐ迎えが来るよ」
江梨子「死んじゃうんだね」
天使「あなたのことを、天国でずっと待っていた人が来るよ」

ゆいが来る。

江梨子「ゆい！」

ゆい「江梨子、一緒に行こう」

江梨子「そうか……、病気で……」

ゆい「ずっと一人芝居の練習をしていたよ。これで二人だね。きっといつかみんなそろってまた出来るよ」

江梨子「そうだね。それまでもっと巧くなっていよう」

ゆい「うん」

江梨子「天使！ありがとう。私に三十日をくれて、本当にありがとう」

天使「気にしないでよ。これが私の仕事だもん」

江梨子「天使には、もう会えないの？」

天使「わからない」

江梨子「そうか……、でも、きっと会えるよ。じゃあ、またね」

江梨子とゆい、去る。

天使「あたしも……楽しかったよ」

【終】